

## 第10章 施設・設備

本学は、須磨キャンパスに文学部と家政学部及び大学院（家政学研究科と文学研究科）、ポートアイランドキャンパスに健康福祉学部という二つの校地からなっている（『大学基礎データ表36』参照）。二つのキャンパスは公共交通機関を用いると約50分の距離にあるため、キャンパスを超えて教育・研究を展開するには限界がある。そこで教育に関しては、全学共通教養科目については二つのキャンパスで授業を行い、専門科目については文学部と家政学部及び大学院は須磨キャンパス、健康福祉学部はポートアイランドキャンパスで授業を行っている。研究に関しては文学部と家政学部の教員（大学院は兼務）は須磨キャンパス、健康福祉学部の教員はポートアイランドキャンパスに研究室を構えている。

須磨キャンパスは、これまで、学部・学科の新設・改編等により、校舎の新築や増改築を行い、教室・実験実習室・研究室等々を移動したり、用途を変えたりする等、使用形態等の変更を繰り返してきた。その結果が現在に至っているのであるが、このような変更が、今のニーズに基づく教育・研究環境として相応しいかどうかの検討が求められる。一方、ポートアイランドキャンパスは、2006年度に新設された健康福祉学部（文学部社会福祉学科からの改組であり、同学科は4年次生のみ、須磨キャンパスで授業を実施している）の完成年度が近づくにつれて、開講授業数が増えてきている。この増加に対応できる教育・研究環境になっているかどうかの点検が必要である。また、各学部や大学院の各種の教育・研究機器は、教育・研究を展開させるために必要不可欠な設備であり、加えて更なる充実を常に考える必要もある。そのため、各学部や大学院が目指す教育・研究と、それを展開する施設・設備との折り合いをどう付けるかが課題となる。そこで本章では、これらの点をふまえて、必要に応じてキャンパスごとに分けて、施設・設備、アメニティの点検・評価を行った。

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

第15章

基礎データ

 大学評価  
 (認証評価)  
 結果

**目標**

**＜施設・設備の改善計画策定＞**

1. 施設・設備を教育・研究・環境の大枠（要すれば中・小分類まで）に区分し、各々の分野における新設・取替・メンテナンス計画を策定する。
2. 上記の各計画について、大学としての優先度を設定すると共に新設・取替・メンテナンス詳細計画を立案する。
3. 立案された詳細計画について、学園の（中期）財政計画の中で計画的に実施する。

**＜施設・設備の地域への開放方針＞**

女子大学であることを前提として、社会の動向を勘案し、中期的年度目標を策定の上、対応策を立案し、実施に移していく。

**A. 施設・設備等の整備**

**必須・大学・学部、大学院研究科の教育研究目的を実現するための施設・設備等諸条件の整備状況の適切性**

**須磨キャンパス**

須磨キャンパスでは、文学部・家政学部・大学院が教育・研究を展開している。『大学基礎データ表 36』に示すように、このキャンパスの校地面積は 145,623.6㎡であり、設置基準上必要な校地面積（25,400㎡：2008 年度取容定員による）を大きく上回っている。また、校舎面積で見ても、必要校舎面積 13,783.1㎡に対して 47,014㎡と上回っている。講義室・演習室・学生自習室の総数は 62 であり、その総面積は 5,821.6㎡である。

前述の施設・設備、アメニティ点検・評価の結果、須磨キャンパスでは、受講者数に合致した適正な広さの教室で展開できていない授業があること、講義室、実験・実習室・研究室の配置が適切でないこと等の施設面での問題が明らかになった。

キャンパス・アメニティ等に関して、校地は広いが、山の斜面にある等の立地条件のため、バリアフリー化やエレベーターの設置をしているが、その数や使いやすさについては検討の余地があることが示された。また、老朽化した机や椅子の交換、トイレの改修等についても、学生のニーズに応えた形で改善が進められているところである。

障がい者への配慮に関して、さまざまな施設で配慮をしてくれているが、まだ完全とは言えない。

施設・設備等を維持・管理する組織としては施設部があり、体制は確立されている。施設・設備の衛生・安全の確保を図るための委員会制度等が整備されつつあり、施設部との連携が待たれている。

**◆文学部**

**[現状の説明]**

文学部が主として使用する講義室、演習室、研究室、自習室等は、本学開学直後である 1967 年に建設された A 館（文学館）と 1986 年に建設された D 館（人間文化研究館）、1994 年に建設された F 館（教室棟）、及び 1994 年に建設された M 館（本館）と、2005 年に建設された H 館（第 2 文学館）にある（『大学基礎データ表 36-2』参照）。

文学部専用の講義室は 3 室（総面積 502.9㎡、利用学生 1 名当たり面積 0.27㎡）、演習室は 5 室（総面積 238.2㎡、利用学生 1 名当たり面積 0.13㎡）、学生自習室は 2 室（総面積 284.2㎡、利用学生 1 名当たり面積 0.15㎡）である。家政学部と共用で使用する講義室は 26 室（総面積 3,391.9

m<sup>2</sup>、利用学生1名当たり1.21m<sup>2</sup>）、家政学部、文学研究科、家政学研究科と共用で使用する二つの学生自習室は2室（総面積257.0m<sup>2</sup>、利用学生1名当たり面積0.09m<sup>2</sup>）である（『大学基礎データ表37』参照）。

文学部専用の学生用実験・実習室は7室あり、その総面積473.2m<sup>2</sup>、収容人員1名当たりの面積は2.4m<sup>2</sup>である。また文学部・家政学部共用の学生用実験・実習室は8室あり、その総面積は1,003.9m<sup>2</sup>、収容人員1名当たりの面積は2.4m<sup>2</sup>である（『大学基礎データ表38』参照）。

講義室・演習室の使用状況で使用率が最も高いのは、2008年度前期では、1～20名規模の講義室の26.6%であり、次いで81～100名規模の講義室の22.3%である（『大学基礎データ表40』参照）。

収容人員が大きな講義室・演習室にはVTR、DVD、プロジェクター等の視聴覚機器が設置されている。またプロジェクターや実物投影機、スクリーン等は可動式の物も常時準備されており、収容人員がそれほど大きくない教室でも持参して使用できるようになっている。

### [点検・評価—長所と問題点]

A館は延床面積も大きく、教育・研究に広く活用している。しかし建築年が古いため、耐震対応のための改修を予定している。F館は6つの教室からなっており、講義専用である。D館、F館とM館は比較的新しく、改修の予定はない。

講義室、演習室、学生自習室に関しては、利用学生1名当たりの面積が小さい。『大学基礎データ表37』に示されているすべての講義室、演習室、学生自習室に関しては、室数及び規模（収容人数）の点では、必ずしも余裕のある状況ではなく、毎年度初めには科目ごとの履修学生数と教室の収容人数の調整が必要となっている。

講義室・演習室の使用状況で使用率が最も高いのは、1～20名規模の講義室であった。このことから少人数による授業が多いと言える。

教室で使う設備については、講義室等に固定された視聴覚機器だけでなく、可動式の物がある点は、文学部の授業を展開する上では適当であると思われる。

### [今後の改善・改革に向けた方策]

文学部の使用する講義室、演習室、学生自習室に関しては、年度初めの調整で対応しており、大学敷地内に新たな校舎を建設する計画はなく、当面この方策で対応していかざるをえないと考えている。

## ◆家政学部

### [現状の説明]

家政学部が主として使用する研究室、実験室、実習室、演習室は、本学開学時（1966年）に建築されたB館（家政学館）と1984年に建築されたC館（生活科学研究館）にある。また一部、A館（文学館）の1階、2階にも、家政学部専用の研究室、実験室、実習室がある。なお講義には先述のF館（教室棟）も利用している（『大学基礎データ表36-2』参照）。

家政学部専用の講義室は5室（総面積526.6m<sup>2</sup>、利用学生1名当たり面積0.55m<sup>2</sup>）、演習室は1室（面積34.4m<sup>2</sup>、利用学生1名当たり面積0.04m<sup>2</sup>）である。文学部と共用で使用する講義室及び文学部、家政学研究科及び文学研究科と共用の学生自習室については、前述（pp.300-301）のとおりである（『大学基礎データ表37』参照）。

家政学部専用の実験・実習室は27室、総面積2,162.3m<sup>2</sup>、収容人員1名当たりの面積は2.5m<sup>2</sup>

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

第15章

基礎データ

大学評価  
(認証評価)  
結果

である。文学部と共用の学生用実験・実習室についても、前述のとおりである（『大学基礎データ表 38』参照）。

家政学部・家政学研究科共用の実験・実習室は 37 室、総面積は 2,163.3㎡、収容人員 1 名当たりの面積は 5.1㎡である（『大学基礎データ表 38』参照）。

講義室・演習室の使用状況（『大学基礎データ表 40』）で最も使用率の高いのは、101～130 名規模の講義室であり、その使用率は 26.9%であった。この他に 20%を越す使用率の教室はなく、51～80 名規模の教室の使用率が 17.9%、81～100 名規模の教室が 16.4%と続いている。

#### [点検・評価—長所と問題点]

家政学部が主に使用している B 館は、2004 年度に耐震壁工事を行い、同時にエレベーターが 1 基設置された。B 館に関しては、耐震壁工事の際に、教員の意見を聴取して改修を進めたこともあり、ある程度の改善が図られたと言える。

大学全体では、規模が拡大するに従って校舎の建設を進め、それに伴って教室を仕切って研究室に替えたり、研究室を合わせて教室にする等、改修・用途替えが多く、講義室、実験・実習室、研究室の配置が適切とは言いがたい。また、傾斜地であるため、校舎がさまざまな方向に建っており、階段を使った移動も多く、休憩時間 10 分間での教室移動が困難な場合がある。教室移動に関しては、屋根のない所を通る必要がある校舎間もあり、雨天時にはその混雑が一層増大する。エレベーターの台数が少ないなど、環境改善を進めているもののバリアフリーな教育環境も十分とは言えない。

講義室のプロジェクター等の設備は年々、充実してきている。その一方で初期に設置された設備の老朽化も進んでおり、順次更新の必要性が生じている。

講義室は、現有の教室に授業を割り当てているため、必ずしも受講者数に合致した適正な広さであるとは言えない。また、管理栄養士養成課程は開講科目が多い上、授業は 40 名のクラス単位で実施しなければならないため、実験・実習室の数と教員の数、特に兼任教員の配置が時間割作成に大きな制約を与えている。

#### [今後の改善・改革に向けた方策]

受講者数に合致した適正な広さの教室で授業を展開する上で、講義室、実験・実習室、研究室の配置をより適正化すべき問題がある。しかしながら、増築ではなく、改修と活用の仕方での改善を図らねばならない。文学部社会福祉学科が健康福祉学部健康福祉学科に完全移行する 2009 年度以降において全体を見直し、検討をしていく。この見直し、検討の結果を改修・メンテナンス計画に反映させる予定である。

### ◆家政学研究科

『大学基礎データ表 37』に示すように、家政学研究科が専用する講義室は 1 室（34.4㎡）、演習室は 3 室（総面積 102.5㎡）である。同研究科には二つの専攻があるが、各専攻ではこれらの講義室や演習室を工夫して使っている。

学生自習室は文学部、家政学部、文学研究科と共用のものが 2 室ある（総面積 257.0㎡）。

#### **食物栄養学専攻**

##### [現状の説明]

大学院研究科専用の施設は、演習室とロッカールームを除き、存在しない。また、設備につ

いても、共通教育費で購入した備品以外には専用のものはない。多くは、学部と共用している。専用の演習室・学生自習室としては、学生総数 25 名に対して、演習室 (36.00㎡/収容人数 12 名) とロッカールーム (隣室との合計で 40.32㎡/収容人数 6 名) が各 1 室ずつある。

各施設の付帯設備としては、演習室には白板、演習用テーブルと椅子がある。ロッカールームには、ロッカーと机が数点あるが、特に個人に割り当てられてはいない。

指導教員の研究室は、ゼミ生と共用になっているが、その面積は、実験・研究内容や大学院学生及びゼミ生数とは必ずしも比例した関係になっておらず、一部には極端な不均衡も見られる。即ち、スペースに非常に余裕のある研究室がある一方で、狭い部屋に教員と大学院生がひしめき合う研究室もある。それによって、ゼミ生が遠慮してなかなか入室できず、卒業研究に支障をきたしかねないケースも見られる。

また、演習室については専用の部屋が 1 室設けられているが、受講人数が多い講義の場合には、学部と共通の教室を使用している。

### [点検・評価—長所と問題点]

大学院生が増加している現在、大学院専用の施設・設備等諸条件の整備は重要である。現状としては、大学院生とゼミ生が相互に遠慮することなく、それぞれの研究、学修に打ち込むことのできる環境にするためには、抜本的な対策が必要である。

### [今後の改善・改革に向けた方策]

大学院専用の施設・設備等の整備を外部資金の導入を進めながら進める。その際、大学院専用の演習室は、より広い面積かつ複数設ける必要があるが新規建築の方途は困難である。

従って、各研究室の面積を所属学生に応じた規模に毎年、フレキシブルに変更できるようにすることで対応し、大学院生専用のスペースを研究室とは別に設け、そこを大学院生が所属研究室とは無関係に活用する体制をとる必要がある。

## 生活造形学専攻

### [現状の説明]

大学院家政学研究科生活造形学専攻の施設・設備は、大学院生用実習室 1 室 (26.13㎡/収容人数 10 名) 以外は、学部学科の施設・設備を共用している。

### [点検・評価および今後の改善・改革に向けた方策]

大学院の教育研究目標を実現する意味から、それに向けた施設・設備の充実を図る必要がある。

## ◆文学研究科

『大学基礎データ表 37』に示すように、文学研究科には専用の講義室はないが、演習室が 11 室ある。その総面積は 382.2㎡である。同研究科には四つの専攻があるが、各専攻ではこれらの演習室を授業で工夫して使っている。

学生自習室は文学部、家政学部、家政学研究科と共用のものが 2 室ある (総面積 257.0㎡)。

## 日本文学専攻

### [現状の説明]

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

第15章

基礎データ

大学評価  
(認証評価)  
結果

日本文学専攻には、日本文学共同研究室と日本文学演習室がある。日本文学共同研究室は、調査のための基本図書を配架したり、PCを設置したりして、学生の便宜を図っている。

**[点検・評価—長所と問題点]**

日本文学共同研究室では、文学研究科の日本文学専攻としての施設・設備等は十分とは言えない。基本図書等に関しては、学部学科単位で図書館経費による購入希望図書の希望を受け付けているが、大学院の研究科としては十分とは言えない。

**[今後の改善・改革に向けた方策]**

外部資金の導入に努力し、施設・設備の整備を図る。

**英文学専攻**

**[現状の説明]**

英文学専攻には、英文学共同研究室と英文学演習室がある。しかしこれらの部屋は授業だけでなく会議にも利用されているのが現状である。

共同研究室にはPC（2006年に大学院の学生のために新しいPCを2台購入し、プリンターの整備を行った。大学院生が日々の研究に使う共同研究室には計3台のPCが設置され、これをもって2～3名の学生に対し、1台のPCが入ったことになる）と、書籍が備えてあり、簡単な炊事場と冷蔵庫もあり、学生が長時間研究に勤しむための配慮がなされている。

他大学の図書館との共同利用については、大学間相互利用（ILL）の制度が整備されている。

**[点検・評価—長所と問題点]**

共同研究室は文学部英語英米文学科所属の教員の共同利用施設でもある。従って、現状では、共同研究室が、「大学院生が研究に携わるための恒常的な施設」となっているとは言い難い。しかしながら、本学の限られた施設状況から判断すれば、大学院生のためだけにスペースを割くゆとりはない。

PCの購入をもって、研究のための装備が整備されたとは言い難いが、学生の研究に役立つように最新のPCを装備しておくことは、学生が積極的に研究に向かうための基本的条件である。なお、PCは整備されたが、ソフトウェア（教材・資料）は充実しているとは言えないので今後充実を図っていく。本学の図書館はスペースが限られ、蔵書は決して多くない。

他大学の図書館の共同利用によって資料不足が補われている。

**[今後の改善・改革に向けた方策]**

大学院生の研究スペースの確保にむけて、文学部英語英米文学科の演習室等を授業に使用して共同研究室の使用頻度を少なくするなど具体案を専攻会議で討議し、実施していく。

研究に必要なソフトウェア（教材・資料）について、個々の教員・学生の要望を聴取し、専攻会議の場で必要性を討議する。必要と認められた場合は共通教育費をその購入にあてる。

**日本史学専攻**

**[現状の説明]**

日本史学専攻の大学院生に必要な基本書籍を揃えた日本史学資料室、日本史学資料整理室と大学院生専用の日本史学共同研究室を設置している。

**[点検・評価—長所と問題点]**

大学院生専用の研究室が準備されていることは一応評価できるが、そこで各学生が落ち着いて研究活動を行うためには、更に設備を整備する必要がある。

**[今後の改善・改革に向けた方策]**

大学院生の研究スペースについて、総合的に検討していく必要がある。

**教育学専攻****[現状の説明]**

教育学専攻の設備・備品は教員研究室以外には、教育学共同研究室及び教育学共同演習室がある。共同研究室には学生各自に机が用意されている。また、共同利用については、学生用のPCが設置され、LAN接続が可能である。PC関連の消耗品等は、学生が利用しやすいよう原則として共通教育費で賄われている。

また、心理学実験室や心理学実習室及び2002年からは臨床心理相談室も設置され、カウンセリングや心理テスト等の実習を受けることが可能である（『神戸女子大学大学院 Guide book2008』参照）。

**[点検・評価—長所と問題点]**

教育学共同研究室と教育学共同演習室は学生が自由に利用できる部屋であるが、貴重な資料も保管している。そしてその管理は、必ずしも徹底していない。これまで問題が起きたことはないが、現状のままにしておくことは望ましくない。

**[今後の改善・改革に向けた方策]**

教育学共同研究室・教育学共同演習室を有効に利用することと、管理を徹底することとはしばしば背反する。学生が自由に利用し、討論や交流に使う教室と、貴重な資料を保管することを目的とする教室とに分割することは、現状でも可能である。

**ポートアイランドキャンパス**

ポートアイランドキャンパスでは、健康福祉学部が教育・研究を行っている。

施設・設備、アメニティの点検評価の結果、ポートアイランドキャンパスでは、施設・設備はほぼ満たされている。アメニティの面についても、ほぼ学生のニーズに沿うものとなっている。

**◆健康福祉学部****[現状の説明]**

ポートアイランドキャンパスでは、神戸女子短期大学や法人本部に隣接して健康福祉学部のD館が建設された。健康福祉学部が専用している研究室、実験室、実習室、演習室は、2006年に建築されたD館と1982年に改築されたC館（生活科学研究棟）である（『大学基礎データ表36-2』参照）。

健康福祉学部専用の講義室は8室（総面積1,043.4㎡、利用学生1名当たり面積3.82㎡）、演習室は7室（総面積310.7㎡、利用学生1名当たり面積1.14㎡）である。学生自習室1室の総面積66.4㎡、利用学生1名当たり面積0.24㎡である（『大学基礎データ表37』参照）。

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

第15章

基礎データ

大学評価  
(認証評価)  
結果

健康福祉学部専用の実験・実習室は12室、総面積899.0㎡、収容人員1名当たりの面積は2.1㎡である（『大学基礎データ表38』参照）。

講義室・演習室の使用状況（『大学基礎データ表40』）で最も使用率の高いのは、収容人員が51～100名の教室であり、その使用率は43.7%であり、次いで101～140名の教室（使用率37.0%）と続いている。

本学部には、「社会福祉士受験資格、精神保健福祉士受験資格、保育士資格、介護福祉士資格等の資格を活かして、福祉の現場で働く人材」の育成という教育目標がある。この目標では、それぞれの指定養成施設としての基準を念頭に置いて状況を評価する必要がある。

#### [点検・評価—長所と問題点]

本学部の学生数は入学定員を下回っており、教室が狭いという問題は生じない。むしろ、少人数すぎて広すぎる教室を使用する可能性もある。後は時間割の組み方と教室数の問題である。

なお、社会福祉士介護福祉士学校指定規則の改定（2009年4月1日から施行）により、養成カリキュラム等が変更される。そのため施設・設備等についても、これに対応する必要がある。

また入学定員を下回るという理由で、全学的な改組が2009年度より実施される。そこでは社会福祉学科（現行の健康福祉学科）から保育士資格を取得するコースがなくなり、新たに健康スポーツ栄養学科が新設される。そのため学部・学科としての教室使用計画も変更する必要がある。

このように過渡期であるため、現段階の問題点を指摘するのは避ける。

#### [今後の改善・改革に向けた方策]

教室数に問題が生じないように、時間割を工夫しながら作成する。

### 必須・教育の用に供する情報処理機器などの配備状況

#### [現状の説明]

##### 1. 情報システム整備の背景と経緯

来るべき情報化社会を見据え、以下のような目的の下に本学は1983年4月からPCを用いた情報教育を開始した。

- (1) 情報化時代の必須修得事項として、単なるリテラシーに留まらず、情報活用・発信能力を培う。
- (2) 教育・研究の高度化に資する。
- (3) 社会のニーズに応える（当時はPCを操作できる人は少なかった）。

その後、私学助成研究施設補助によりオフィスコンピューター・ACOSシリーズを導入し、主に教員・大学院生の研究面でのサポートを行い、1995年にはインターネットに繋がるワークステーションを導入して教員と学生希望者にメールサービスを行った。更に、この年以降、私学助成経費補助を活用して、阪神淡路大震災後の翌1996年には全学規模の学内ネットワークを張り、同時に全学生にユーザー・アカウントを発行してインターネット環境を教育に積極的に利用する環境づくりを始めた。2006年度には文部科学省による平成18年度サイバーキャンパス整備事業に「行吉学園アジア・パシフィックサイバーキャンパス事業」が採択され、10月からセキュリティと安定した情報通信機能を維持する、認証VLAN+検疫システムを取り入れたマルチホーミングネットワークを稼働させた。



## 2. 教育用情報機器の現状

現在の整備状況は p.308 の表 10-1 のとおりである。1983 年情報教育開始当時は 18 台の P C 8801 でスタートしたが、1989 年には 60 台の P C 9801 で授業を展開した。1995 年にはこの内半数をウィンドウズ P C に換え、翌年にはウィンドウズ P C とマッキントッシュ P C に変更し、台数も 140 台へ増やした。(現在では、すべてがウィンドウズ P C となっている。)

これ以降は私学助成金を得てネットワークの構築と P C・サーバ類の整備を始め、現在に至っている。

### <採用システムの特徴>

不特定多数のユーザが P C を入れ替わり立ち替わり利用する大学等の環境では、ハードディスクという稼働部品に起因するトラブルが頻発する。これを避けるため、本学では、ネットワーク・ブートによって P C を起動し、作業用の記憶場所としてクライアント側のディスクを一切使わず、主記憶或いはサーバのディスク領域を用いて作動するディスクレス運用方式を採用している。これにより、ウイルス感染の予防、不正ソフトウェアのインストールによるトラブルを防ぐことができる(ハワイセミナーハウスを除く)。

## 3. 運営体制について

2005 年までは、情報システム運営委員会において、機器更新やメンテナンスの手配等を行ってきた。併設の短期大学と事務系の同様の組織と連絡を取りながら、全体としてのシステムを維持してきたが、2006 年度に行吉学園情報センター設立準備委員会を設けて、2007 年度のセンター設立に向け、9 月まではほぼ毎週委員会を開催してきた。その結果、2007 年 4 月より、法人本部直轄の組織として学園情報センターがスタートし、ネットワークとサーバ等のハードウェア面の管理、消耗品の補給等のメンテナンスはセンター業務としてこの組織が一括して行い、情報関係教員は教育研究に専念できる体制が整った。なお、その運営には、教員は運営委員として参加することで、教育研究サイドと事務系サイドの調整を図っている。

## 4. 情報システムの利用

学生が利用できる機器類は以下のとおりである。

- (1) 授業がない時は、須磨キャンパスの M 203 教室と M 204 教室及びポートアイランドキャンパスの D 305 教室はオープン利用に供する。
- (2) 須磨キャンパスの A 310 教室、A 311 教室は基本的にオープン利用として運用するが、語学、統計学、栄養関係の授業にも使用する。
- (3) 図書館 3 階と図書館 4 階はオープン利用のみとする。
- (4) C A D 実習室 (B 412) はインストールされているソフトウェアの性格上、授業以外の利用は行わない。
- (5) 学生は全員がアカウントを持ち、メール等のインターネット・サービスを利用できる。なお、e メールは今年度より Web メール化したので世界中どこからでも本学メールシステムにアクセス可能となった。

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

第15章

基礎データ

 大学評価  
 (認証評価)  
 結果

表 10-1 ハードウェアの整備状況

1. クライアント機器

PC	機番	台数	設置場所
IBM ThinkCentre	8320-8KJ (Ce2.2GHz/256MB)	40	A310
IBM ThinkCentre N104T7C Ultra Small	9218-26J	69	M203
IBM ThinkPad G41 ノート PC	2881-4BJ	42	A311
		14	図書館 3F
		16	図書館 4F
		61	A304 (第1LL)
	61	A307 (第2LL)	
	2881-5JJ	60	健康福祉学部情報処理実習室 (ポートアイランドキャンパス)
IBM IntelliStation	6216-20J	30	B412 (CAD 実習室)
LenovoThinkCentre	6449-A18	70	M204
HP ノートパソコン (英語版)	Pavillion dv6000	32	ハワイセミナーハウス
合計		495	
2008年5月時点の収容定員数		3020	
PC1台当たりの学生数		6	

2. サーバ機能

機能	機種名等	台数	設置場所
ファイルサーバ	xSeries346	1	M202 (情報準備室)
メール受信サーバ		2	
ADサーバ		2	
教育研究系メール送信サーバ	pSeriesAIX	1	
教育研究開発用サーバ群	xseries342	7	
オンデマンドプリントサーバ	xseries306	2	
Webアプリケーションサーバ	xseries3250	3	
Webサーバ	xseries345, AIX4.1	2	
管理サーバ	xSeries336	1	M203
仮想ディスクサーバ	xSeries336	6	M203, A311
メディアサーバ	xSeries336	4	A館LLサーバ室
仮想ディスクサーバ	xSeries336	6	
合計		37	

3. プリンター

種類	機種名等	台数	設置場所
カラープリンター	Xerox Docuprint C3140	8	A310, A311, A304, A307
	Xerox Docuprint C3250	2	M203, M204
白黒プリンター	Xerox Docuprint 405	2	M203, M204
合計		12	

[点検・評価—長所と問題点]

1. 教育用情報機器の整備状況

現在の収容定員数から計算すると、PC 1台当たり学生が6名という計算になり、2004年度の小・中・高平均と同程度ということになっている。現在は、60名クラスの授業で使用できる情報実習室は3室である。情報担当専任教員は現在4名おり、須磨キャンパスに情報実習室が3室あれば余裕を持った時間割編成が可能であり、PC 1台当たりの利用者数の低減と相俟って、学生サービスの向上に寄与できる。

2. 運営体制

2006年度までは教員がボランティアで教育用情報機器類のメンテナンスを行ってきたが、運営予算等も含めて2007年度から学園情報センターがハードウェア面のメンテナンスを行うようになった。これにより、教員は本来の教育・研究に専念できる状態になったことと、従来の短期大学・大学・事務系別々の運用体制に比べると、センター化したことによる効率の点で、この体制は評価できる。ただ、学生への窓口としては当該センターが広くオープンになっているわけではないため、日常的に起こる各種のトラブルには教員が対処せざるをえない場面が多く見られる。将来的には、必要な人員として臨時職員・学生アルバイトを含めて考慮し、ヘルプセンター等の学生支援体制を整える必要がある。

3. 利用状況について

今年度前期の2情報教室(M203及びM204教室)の利用頻度は、23コマ/(2室×5日×4限)で半分以上は授業で使用している。授業のない時間帯は学生が自由に利用できるようにしており、各学期末には空きを待つ学生が出るほどである。下図は、1年次生の4月、5月の2ヶ月間及び2年次生以上の過去2年間のログイン回数—人数分布である(表10-2、表10-3、表10-4参照)。

表10-2 1年次生の直近2ヶ月間のログイン回数—人数分布

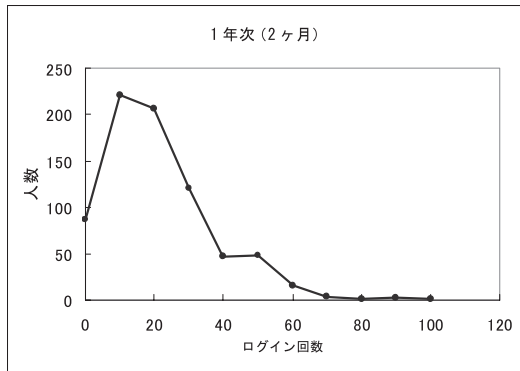


表10-3 2年次生以上の過去2年間のログイン回数—人数分布

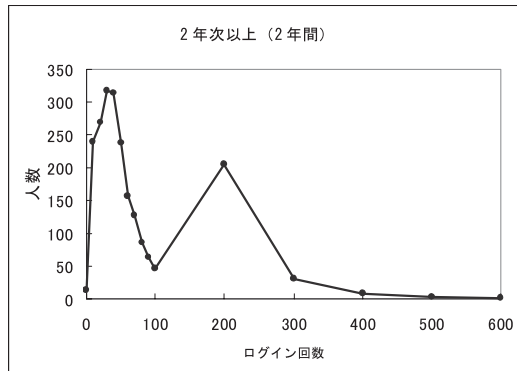


表10-4 ログイン回数

	1年次生 (2ヶ月間)	2年次生以上 (2年間)
最小値	0	0
最大値	92	89
平均	17.1	51.6
人数	754	2123

100回を超えるログイン回数の学生は、ほぼ毎日学内のオープン利用のPCにログインしている計算になる。1年次生配当の授業は必修ではないが、学科によっては、ほぼ全員が受講し

ているため、授業のみの利用でも10数回のログイン回数になる。この現状ではファイルサーバ等の性能・ディスク容量(2TB)は余裕があると言えるが、将来的には、情報以外の授業で情報通信技術(Information and Communication Technology / 以下、「ICT」と示す。)の利用が進めば、容量増強を図る必要が出てくると思われる。今のところ、Winny等によるファイルの不正取得でファイルサーバのディスク容量不足を引き起こす事態にはなっていない。現在はWinnyプロセスを停止する処置をとってはいるが、利用規程を早急に策定するなど、全学をあげた利用者モラルの研修制度を整える必要がある。

#### [今後の改善・改革に向けた方策]

##### 1. 教育用情報機器の整備

将来的には、画像ストリーミングを利用したICT利用の授業が増加することが予想されるため、対外接続回線を更に高速化させることも検討しなければならない。

##### 2. ICT利用授業の充実

リメディアル教育を始め、FD対策としてICT利用を一般の授業に広める必要がある。また、海外での長期滞在教育も始まっているので、対象学生とのコミュニケーションツールとしてICTの利用は欠かせないと思われる。

##### 3. ネットワークセキュリティの増強

ネットワーク等のハード面は幾分改善されたが、現状のネットワークではドメイン参加しているPCが検査されていなくてもドメインサーバに直結されてしまう欠陥が存在する。当面は利用面に対処するしかないが、将来的には検討が必要である。

##### 4. 講習会等開催情報の提供(eメール等インターネット・サービスによる)

今後の課題として検討対象とする。

## B. 先端的な設備・装置

選択・先端的な教育研究や基礎的研究への装備面の整備の適切性

選択・先端的研究の用に供する機械・設備の整備・利用の際の、他の大学院、大学共同利用機関、附置研究所等との連携関係の適切性

### ◆家政学研究科

#### 食物栄養学専攻

##### [現状の説明]

B館1階(B110)、C館2階(C207)に共通機器室があり、RAS 3000、リアルタイムPCR、示差走査熱量計(DSC)、原子吸光光度計、塩濃度計を備えている。また、P2実験室(C館1階)、電子顕微鏡室(C館3階)があり、C館2階には、ガスクロマトグラフ質量分析器(GC-MS)を備えている。これらは各研究室共通で使用できる。また、動物飼育室、コールドルーム等もある。この他に高速液体クロマトグラフ(HPLC)やガスクロマトグラフ(GC)等の分析機器を備えている研究室もある。

##### [点検・評価—長所と問題点]

機器や設備については老朽化しているものもあるが、概ね最低必要なものは備えられている。共通機器室の機器については共通機器管理運営委員会により有効な利用が図られている。新規機械が導入される際には取り扱い説明のセミナーが開催される。大学院は大学と施設・設備を

共有することにより有効に利用され、先端的研究が推進されている。なお、GC-MASについては導入後20年近くが経過し老朽化していたため、2007年度に大学の経費により最新式の機種に更新した。機器収納のスペースに限りがあるため、最新機械を導入する際には、古い機器の廃棄を伴う。

#### [今後の改善・改革に向けた方策]

共通機器管理運営委員会が中心となり、機器のメンテナンスと使用頻度の低い機械、使用不能な機械のリスト・アップを定期的に行い、修理か、廃棄かの判断を行い、最適な条件で機器類が使用できるよう配慮する。

### C. 夜間大学院などの施設・設備等

選択・夜間に教育研究指導を行う大学院における、施設・設備の利用やサービス提供についての配慮の適切性

#### [現状の説明]

本学では、2001年4月から、大学院文学研究科に昼夜開講制を導入し、夜間の時間帯（6限目、7限目）に、三宮教育センターで授業を開講してきた。昼間の須磨キャンパスに比べ、三宮教育センターは神戸市中央区の交通至便な地にあり、社会人入学生を初め、誰もが学びやすい勉強環境の提供を目的とするものである。

同センターには、大学院用としては、特別講義室をはじめ、大小の演習室（36席と20席）と図書室が利用に供されている。図書室は、本館図書館の分室として、夜間講義用の参考図書を中心に配置している。また、本学コレクションの一つ「現代詩文庫」を所蔵している。

また図書室に並んで、日本でもトップクラスに位置付けられる「古典芸能研究センター」が併設されていて、日本文学専攻等では、このセンター資料を活用した極めて高度な授業が展開されている。「古典芸能研究センター」は、能楽・近世芸能・民俗芸能に関する優れた資料を多数収蔵し、学内外を問わず、広く一般の閲覧に供している。大学院生は、夜間の授業時間帯にとどまらず、常にその資料の閲覧サービスを受けることができる。しかもそこでは学外の研究者等の出入りもあり、大学院生にとっては、自ずと恵まれた研究交流の場となっている。

#### [点検・評価—長所と問題点]

昼間と夜間の大学院学舎が、須磨キャンパスと三宮教育センターに分散配置されており、その行き来は不便であるが、三宮教育センター自体の立地条件は申し分なく、学生にも好評である。しかし、大学院学生共同研究室が三宮教育センターにないのは、問題である。今のところ、図書室の閲覧ブースや、古典芸能研究センター閲覧室がその代わりを果たしており、不便ではないものの、設置が検討されてしかるべきであろう。とはいえ、大学院講義が古典芸能研究センター資料を縦横に活用しながら進められている教育環境は特筆すべきもので、高く評価される。とりわけ同センターの図書は、貴重本を除き、すべてが開架されていて、日本文学専攻生はもちろん、日本史学や教育学専攻生にとっても、申し分ない学修施設として機能している。一方で、その恩恵に浴さない英文学専攻にとっては、図書室資料も参考書程度にとどまっていて、各専攻間のアンバランスへの対応が必要である。

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

第15章

基礎データ

大学評価  
(認証評価)  
結果

**[今後の改善・改革に向けた方策]**

文学研究科の特性として、各専攻の特性に配慮した文献・図書の整備充実が求められる。三宮教育センターにおける大学院の夜間開講をより充実したものにするためには、特に英文学専攻を対象に、図書資料の重点的再配置が必要であろう。各専攻間のアンバランスを解消するためである。

**D. キャンパス・アメニティ等**

**必須・キャンパス・アメニティの形成・支援のための体制の確立状況**

**[現状の説明]**

**須磨キャンパス**

須磨キャンパスは、須磨区の山手にある広大な須磨離宮公園に隣接し、緑豊かな自然環境にあり、これを学園生活に生かせるよう配慮することを目標としている。このため、1988年に大学の裏山（青山）に学生の健康を守り、体力を増進することを目的として散策道「万葉の道」を設置した。翌年には散策道周辺の植物に植物名と関連万葉歌を記載した説明板が取り付けられ、施設課に届け出れば自由に散策できるようになった（『2008年度学生生活の手引』p.55参照）。また、隣接した須磨離宮公園と2007年にキャンパス・パーク（CP）連携を結び、学生、教職員が入園料なしに自由に須磨離宮公園を利用できるようになった。これにより、須磨キャンパス背後の保安林等の所有地を含めた大学全体の敷地（約16万㎡）と公園の管理する敷地を合わせると約100万㎡となり「百万平方メートルの連携」となった。

**ポートアイランドキャンパス**

このキャンパスには、法人本部や神戸女子短期大学が存在する。また、このキャンパスは、神戸市の中心部と直結した都市型のキャンパスで、2007年度には近隣に3大学が新設され、学園都市としての機能が充実してきている。そこでキャンパス・アメニティも、近隣の大学や短期大学との連携の中で確立しつつあるのが現状である。

**[点検・評価—長所と問題点]**

**須磨キャンパス**

須磨キャンパスは、校地は広いが、山の斜面に立地しているため、校舎間の繋がりが悪く、移動は急坂や階段を上り下りする必要がある。むろんバリアフリー化を行い、エレベーターも設置しているが、その数や使いやすさについては検討の余地がある。また、A館、B館等の講義室に関して、老朽化した机や椅子の交換、トイレの改修等学生のニーズに応えた形で改善が進められている。

**ポートアイランドキャンパス**

ポートアイランドキャンパスの健康福祉学部は校舎も新しく、2008年度には学生も3年次生までしかいないため、現時点では大きな問題はない。しかし福利厚生施設を神戸女子短期大学と共用しているため、今後全学年が揃った場合に向けて調整をしている。

**[今後の改善・改革に向けた方策]**

今後も引き続き、教育・研究環境の整備と共に学生サービスの向上に努めていく予定である。

## 必須・「学生のための生活の場」の整備状況

### [現状の説明]

#### 須磨キャンパス

須磨キャンパスには学生生活を支援する福利厚生施設として、保健室、学生相談室、ラウンジ、カフェテリア（学生食堂）、ブックショップ、郵貯キャッシュコーナー（ATM）、クラブハウス、学友会室等がある。カフェテリアは、地下1階に行吉学園法人本部事業課が運営するカフェカーrier「マーベル」があり、手づくりのパンや飲み物を販売している。1階には学生食堂「Fountain」があり、2階にも軽食堂と売店を設置している。

学生食堂については、2007年3月に従来の運営業者が廃業、撤退したため、改修を行い、新規事業者が4月から運営を開始した。この際、学生からの要望が高かった従来休業していた土曜日の営業を行うこととなり、学生の利便性を向上させた。更に、メニューの見直しも行き、一部は価格の引き下げを行った。同時に、A館ラウンジに、従来はなかった飲料の自動販売機を設置し、学生がくつろげる空間になるよう配慮した。「マーベル」には、ピアノを設置し、定期的にクラブやサークル、教員がコンサートを開催している。なお、食堂の利用時間は以下のとおりである。

1階学生食堂は平日11時30分～14時30分、土曜日9時～14時の営業、2階と地下は平日のみの営業で、軽食堂（2階）は11時～16時30分、売店（2階）は8時30分～16時30分、「マーベル」（地下）は8時～18時30分となっている。

学生から、学内にくつろげる場が少ないとの意見があったため、須磨キャンパスの中庭に、家政学科の学生がデザインしたベンチ付きの東屋を設けた。また、駐車スペースとして使われていた図書館正面玄関（南入口）前の空間にもテーブルと椅子を配置した。更に、学生の苦情が多かったトイレの老朽化、臭気に対応するため、2007年春にB館、2007年夏にA館のトイレを全面改修し、明るく清潔なものにした。また、その際に実験中の薬品を浴びる等の事故に対応するため、従来設置されていなかった緊急用シャワーと眼の洗浄器をA館1階実験室近くの身障者トイレに、そして、C館各階女性用トイレに緊急用シャワーを設置している。

クラブ活動を行う場所として弓道部から要望のあった弓道場の老朽化の改善については、2008年度に改修を行った。また、茶道部等が活動を行う作法室（和室）についても傷んでいた畳と襖、壁の改修を行った。

老朽化が進んでいる学友会室に関しては、青山会（同窓会）<sup>せいざんかい</sup>の理解と寄付により同窓会館建築計画に合わせて、学友会室を撤去後、跡地に3階建て同窓会館を建設し、1階部分を学友会室、2、3階部分を同窓会が利用することが決定し、2008年夏から着工し、年度末に竣工の予定である。

#### ポートアイランドキャンパス

ポートアイランドキャンパスには、保健室、学生相談室、ラウンジ、学生食堂、売店、クラブハウス、ポートアイランドキャンパス学友会室等がある。学友会室を除いたこれらの設備は同じキャンパス内にある神戸女子短期大学との共用である。

### [点検・評価—長所と問題点]

学生のニーズに応えるため、さまざまな配慮を行ってきた。須磨キャンパスにおいては、教室内装やトイレ等学生の生活に直接繋がる場所については徐々に整備されつつある。学生食堂、

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

第15章

基礎データ

 大学評価  
 (認証評価)  
 結果

売店の営業時間の延長等もその一つである。しかしながら、従前の業者が数多く販売してきた弁当の販売を新規業者が取りやめたため、昼食時の短時間に学生食堂へ学生が集中してしまう傾向が強くなり、混雑に対する学生の苦情が増加している。また、食堂で提供されるメニューの内容や味についてのクレームもある。

#### [今後の改善・改革に向けた方策]

須磨キャンパスの食堂の混雑緩和、弁当の販売等に関しては大学、食堂棟参入業者間で構成する「食堂棟運営協議会」において協議した結果、弁当を2008年度から販売したので学生や教職員への利便性が高まった。また、学生部が中心となり従前よりも食堂棟運営協議会の開催回数を増やすこと及び食堂運營業者との個別連絡会を行うなど、より細かな学生ニーズの反映ができる体制を整えることを目指している。これらの成果として、2008年度後期から食堂メニューを見直すことが決定している。

ポートアイランドキャンパスについては前述のように短期大学との共用であり、学生数が少なかった2007年度までは大きな問題はなかったが、2009年度は健康福祉学部の学生が4年次生まで揃うと同時に新学科の開設も計画されており、学生数が増加した場合には新たな問題が生じる可能性があり、これらに対する検討も始める予定である。

## 学生寮

### [現状の説明]

本学では創設者の強い意向に基いて、開学当初から学生寮を開設してきた。

現在、天神寮（41室82名収容）、行幸寮（42室84名収容）の2寮を運営してきたが、開設以来年月が経過したため、天神寮は2007年度に大幅な改修工事を行った。また、行幸寮は建替えのため2008年度は閉寮している。

天神寮は長期の休暇の期間を除いて賄い付きであり、地方出身の学生にとっては、安心して就学することのできる施設として好評を博している。

行幸寮は学生のニーズに応じて一人部屋で自炊制に生まれ替わる（2008年度末竣工予定）。

### [点検・評価—長所と問題点]

従来から入寮希望者については、1年次生対象で入寮期間を1年間に限定している。これは2年次から一人暮らしをするための準備期間として、1年間で規則正しい生活を身に付けてもらいたいという大学の意向によるものである。

なお、地方からの学生の下宿等については、文学部、家政学部の学生へは学生課が、健康福祉学部の学生へは、事業課が紹介の機能を果たしており、特に問題は生じていない現状である。

### [今後の改善・改革に向けた方策]

最近、学生が個室での生活を望むことが多いこともあり、行幸寮のワンルーム化（自炊方式）と室数の増加（108室・108名収容）、入寮期間を2年間に延長することを決定し、建て替え中であり、2009年度より入寮を再開する。天神寮は従来通り賄い付きとし、多様化してきた入寮生のニーズに応えつつ、安全・安心な施設として運営を図っていく。



**必須・大学周辺の「環境」への配慮の状況****[現状の説明]**

須磨キャンパス周辺では、学友会が中心となって呼びかけ、学友会のクラブ構成員や有志学生により、キャンパス周辺の高倉台入口、「こども病院前」バス停（2箇所）、青山バス停で、クリーン作戦（清掃活動）を毎月1回実施している。また、自動車及びバイクによる通学を全面禁止としている。これは、駐車スペースがないことと、本学前の道路が幹線で交通量が極めて多く危険なためであるが、環境に対しての配慮でもある。しかしながら、ごく一部ではあるが、学生所有と見られるバイクが大学周辺の空き地に不法駐車している。またキャンパスの向かいにある「県立こども病院」駐車場での自動車の不法駐車があり、苦情があるたびに対応している。更に、大学学生寮周辺においても不法駐車をなくすためのビラ貼りや声かけ等を学生寮自治会役員を中心とした寮生が中心に行っている。

2007年5月に「神戸女子大学・エコ活動宣言」を行い、地球温暖化防止策への決意を示し、両キャンパスで本格的なエコ活動に取り組むことにした。その主な活動は、①省エネルギー化、②廃棄物削減、③省資源化、④緑化推進、⑤教育活動の5本の柱からなる。①では不要な電灯の消灯や節水、ウォームビズ、クールビズ運動の促進、②では廃棄物の再利用、マイバッグ、マイ容器運動、③では紙ゴミの削減と有効利用、生ゴミの肥料化、④では屋上、壁面の緑化、須磨離宮公園との連携によるキャンパスの緑化の推進を中心に行っている。⑤の教育活動は、恵まれた自然環境をもとに、学生の自然観察学修、環境教育、キャンパス菜園を活用した食育教育等、大学本来の多彩な教育活動を展開して、将来的にはエコキャンパスの実現を目指している。

活動の進め方は、最初から大きな数値の目標は立てず、教職員、学生の身近で「できることからの取り組み」から始め、定期的にその成果を評価しながら、目標設定へ段階的に進めていく予定である。

**[点検・評価—長所と問題点]**

須磨キャンパスに関しては、大学周辺の環境に対して、適性かつ十分な配慮を行っている。これにより地域との繋がりも深まり、周辺地域から高い評価を得ている。今後、このような取り組みをポートアイランドキャンパス周辺の環境に対しても拡げていく必要がある。

エコ活動宣言は、全学的な取り組みであり、キャンパスによる違いはない。

**[今後の改善・改革に向けた方策]**

地域との繋がりを重視し、今後も地域に根ざした活動を継続する。ポートアイランドキャンパス周辺に対する取り組みも企画する。

**E. 利用上の配慮****必須・施設・設備面における障がい者への配慮の状況****須磨キャンパス**

学内のユニバーサル・デザイン（バリアフリーの実現化）は、建造物を中心に進行している。本学の建造物の配置は、山を切り崩して建設されているため、傾斜や段差が多い。

そのような環境下で障がい者への配慮を何処まで可能かを入学希望者も考慮しながら①車椅子利用者等に対する配慮、②聴覚障がい者に対する配慮、③視覚障がい者に対する配慮に取り

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

第15章

基礎データ

大学評価  
(認証評価)  
結果

組んできた。その結果、各所になだらかなスロープが設置されている。

また、音声案内付きのエレベーターが設置され、トイレ、校舎の出入り口、階段等には、視覚障がい者のための点字パネルや手すりが設置されている。このように学内において、障がい者が安全に移動できるよう配慮を行ってきた。

### 教室棟

#### [現状の説明]

教室棟については、建設年度が異なるため、障がい者への配慮には、多少差異がある。しかし、建物入口へのスロープの設置、高低差のあるスペースの手すり設置、一部点字ブロックの設置等は、同時期に整備した。

#### [点検・評価—長所と問題点]

B館は2005年の耐震補強工事に伴い、新規エレベーターの設置、通路の拡充、照明度アップ等の改善ができた。2007年度、A館についてはトイレの改修工事を行い、身障者用トイレを1箇所設置した。しかし、A館は、大教室A 409、410、411教室への車イスの移動が教室を通り抜けてのみ可能であり、授業中の教室があると階段を使つての移動となる。建築年数が古くレイアウト上の大きな課題があるためである。また、食堂棟、F館については、共に3階建てとなっているが、エレベーターがなく、車椅子での自力のフロア移動は不可能である。

#### [今後の改善・改革に向けた方策]

A館については、1～2年以内に耐震工事を予定している。この工事に併せて、障がい者への配慮を行い改善工事に組み入れたい。

### 図書館

#### [現状の説明]

1989年に竣工した現在の本学図書館には、障がい者への設備として2階に身障者用トイレを1箇所設置している。2階東出入口を利用し、3階から4階への昇降はエレベーターを使用すれば閲覧席へのアクセスは可能である。玄関の段差もほとんどなく、入館に支障はない。

#### [点検・評価—長所と問題点]

施設面での障がい者への配慮としては、トイレとエレベーターの使用が可能であるが、障がいの内容に応じた施設・設備は十分とは言えない。特に視覚障がい者への対応は課題と言える。目の不自由な利用者への点字図書が皆無に近いことと、ライト付ルーペを2007年度に購入したが、館内に点字の表示がない。また、DAISY(\*)読書器等種々の障がい者用備品、機器が全般的に不足している。

\* DAISY (Digital Accessible Information System) : 国際標準規格のデジタル図書録音システム

#### [今後の改善・改革に向けた方策]

必須の施設・設備は備えているが、今後視聴覚障がい者への設備として音声・拡大読書器や点字製本機、簡易筆談器等が必要になろう。しかしながら費用との関係で設備・機器の充実には段階的に取り組まざるをえない。今後も障がい者の入学状況も見ながら計画的に取り組む必要がある。

地域に開かれた大学を目指し、高齢者への配慮の点からも施設の改善に努めたい。

### 体育文化ホール

#### [現状の説明]

体育文化ホールは、本学のスポーツ・文化施設として1993年に建設された。学内では、正課スポーツ授業・学友会運動部活動を主体として利用されているが、地域連携を目的として各種文化行事等も開催されている。

2005年には『神戸女子大学スポーツ施設管理運営規程』及び『神戸女子大学体育文化ホール使用規則』が制定され、現在はそれに則り、管理運営がなされている。

正門から体育文化ホール北側までの通路は図書館を迂回する登り坂であるが、そこからは緩やかな下りスロープが整備されている。館内については、アリーナ1階への移動も緩やかなスロープが設置されている。更に、地階、アリーナ2階の観覧席への移動についても、それぞれエレベーターが設置されているなど、障がいのある学生のみならず、中・高年のための体操講習会（ADL講習会）の参加者等への配慮もなされている。

#### [点検・評価および今後の改善・改革に向けた方策]

必要に応じて、スロープやエレベーターが設置されており、障がいのある学生や来学者等がスムーズかつ安全に移動することができる。また、女性用ではあるが、身障者用トイレも設置されている。しかしアリーナで行われるウェルネス活動に必要な「視覚障がい者」或いは「聴覚障がい者」用の特殊設備は充分とは言えない。

### ポートアイランドキャンパス

須磨キャンパスが低層の横の広がりがある建造物で構成されているのとは対照的に、ポートアイランドキャンパスは、埋め立て地でもあることからフラットな校地に比較的高い建造物でキャンパスが構成されている。1992年度に短期大学のキャンパスが開設されたが、2006年度には、大学の1学部である健康福祉学部が、このキャンパスに誕生した。学生食堂、図書館、グラウンド等は、短期大学との併用である。

#### [現状の説明]

須磨キャンパスに比べ建造時期が新しい分、車椅子利用者等に対する配慮はなされている。特に、健康福祉学部の使用頻度が高いD館については、2006年の竣工であり、各所に配慮がなされている。音声案内付きのエレベーターも間口が広く、車椅子での乗降が、他の建造物よりも容易になっている。

#### [点検・評価—長所と問題点]

施設面での障がい者への配慮としては、身障者用トイレは、A館（2箇所）、C館、D館に設置されている。エレベーターは、各館に設置されているし建物入り口にはスロープが設けられている。

しかし、点字ブロックは、最も新しいD館のみの設置となっている。また、学生食堂は、2階建ての2フロアであるが、フロアの移動は若干不便である。

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

第15章

基礎データ

大学評価  
(認証評価)  
結果

**[今後の改善・改革に向けた方策]**

健康福祉学部は、完成年度を迎える2009年度は、また新たな学科再編のスタートの年となる。これに伴い学生数が増加し、更に短期大学生との併用施設が増えることが予測される。

障がい者が安心してかつ安全な動線が確保できるよう、須磨キャンパスと同様、計画的に障がい者のニーズに応じて対処する。

**必須・キャンパス間の移動を円滑にするための交通動線・交通手段の整備状況**

**[現状の説明]**

2006年度から健康福祉学部がポートアイランドキャンパスに設置された。このため、健康福祉学部の学生が、須磨キャンパスに移動してクラブ活動等を行う利便を図るため、キャンパス間に週2回1往復連絡バスを運行した。しかしながら、利用率が低く(2006年度、1日当たり利用者10.1名、1台当たり2.5名乗車、乗車率は52.9%(1名でも乗車していれば100%とカウント))、同年度末をもって運行を休止した。2007年度には、健康福祉学部の学生が須磨キャンパスで全学共通教養科目を履修することを可能にするため曜日を限定して、連絡バスの運行を実施(4日間)したが、履修学生がいなかったため、運行を中止した。

**[点検・評価—長所と問題点]**

健康福祉学部をポートアイランドキャンパスに設置した翌年の2007年度、新たにポートアイランドに3大学の開設があった。交通アクセスの問題については、大学独自での解決は困難であるが、このことにより4大学連絡会議を定例で行い、交通問題を協議した。ポートアイランドへの移動手段は、ポートルライナー(神戸新交通)に負うところが大きく、神戸新交通とも協議した結果、8時台のラッシュ時のダイヤは、最大限間隔を短縮して、運行することとなった(3分20秒間隔を2分45秒へ、その結果8時台に2本の増便)。更に4大学が揃ったことで、神姫バスの運行、遊覧船(通学船として)の協力もあり、多少なりともポートルライナーの混雑緩和になった。

このように公共交通機関(神戸市バス、神戸新交通)が本学の要望を入れて増便や臨時便の対応もしていることも考慮すると、それなりの利便性は評価できる。

本学は、ポートアイランドと須磨キャンパスの二つのキャンパスを持つことになった。このため、従来なかったキャンパス間の移動が必要になってきた。公共機関を用いるとポートアイランドから須磨へは、ポートルライナー、JR、神戸市バスを乗り継ぐことになり、片道610円、約50分かかり、経済的、時間的に負担となる。このため、連絡バスへの要望は当初強かった。しかしながら、2006年度に運行した形態では利用者が極端に少なく、運行を休止せざるを得なかった。

これは、この時点では1年次生のみしかおらず、須磨キャンパスまで移動してクラブ活動を行う学生が少ないからと分析した。また健康福祉学部の特性(必修科目や実習が多い)も影響していると考えられる。

**[今後の改善・改革に向けた方策]**

2008年度は、健康福祉学部の学生は3年次生までとなり、前年度より学生数が増えた。また、須磨キャンパスからポートアイランドキャンパスへ学生が移動してクラブの指導をする等、相互の移動の機会が増えてきている。このため、ポートアイランドキャンパスと須磨キャンパス

間の移動に伴う交通費の一部を補助する試みやポートアイランドキャンパスで独自のクラブを立ち上げ、須磨キャンパスと同様の学友会から補助を行う試みを始めている。今後、各クラブから連絡バスの再開を望む声が高まれば、学友会総会等での決議を受けて再検討を行う予定である。

しかしながらバス運行は多額の費用と監督官公庁との調整、加えて駐車スペースの確保等沢山の課題を解決しなければならない。運行費用も学生の負担の公平性からは、受益者負担も検討せざるをえない。

一方でポーアイ4大学連携協議は協定締結を実現し、具体的な連携が教務、学生支援、入試広報、図書館、エクステンション部門で行われつつある。その一環で教養科目の単位互換やクラブ活動の合同運営等が実現に向けて話し合われている。学生にとってみれば、遠い須磨キャンパスでの活動よりも近くの4大学での活動の方がイメージしやすい。

他方で2009年度は健康福祉学部の完成年度であるが、更に学科再編のスタートの年となる。基本的には、2009年度は健康福祉学部の学生はポートアイランドキャンパスに集結することになる。その中で、どの程度、キャンパス移動の必要性が生じるのか、状況を予測しながら方策を講じたい。

## 選択・各施設の利用時間に対する配慮の状況

### [現状の説明]

#### 須磨キャンパス

須磨キャンパスの学内施設は、授業時間の他に、平日の早朝7時～8時50分、昼休み12時10分～13時、放課後16時10分～19時30分と休日8時30分～18時に使用することができる。

図書館は平日9時～19時、土曜日10時～17時に開館しているが、授業が行われている平日は8時30分に開館し、6月23日から8月1日までの平日の閉館は20時である。

PC実習室の使用可能時間は、平日9時～19時30分、土曜日は9時～16時30分である。

#### ポートアイランドキャンパス

ポートアイランドキャンパスの学舎は平日8時～19時、運動施設は平日9時20分～18時30分に使用できる。

図書館（短期大学図書館）は、平日9時～19時に開館している。

PC実習室の使用可能時間は、平日9時～19時30分である。

### [点検・評価—長所と問題点]

学内施設が授業時間以外にも自由に使えることは、「自立心・対話力・創造性」という大学が掲げる教育目標を学生が達成するのに役立っている。

図書館の開館時間が若干短く、須磨キャンパスでは日曜日、ポートアイランドキャンパスでは土曜日・日曜日は休館となっているが、女子大学としての性格上、遅くまで開けていることはセキュリティに問題がある。学生の帰宅時の安全についても考慮するとほぼ適正なものであるが、学生からの要望により、比較的日子が長くなった6月23日から8月1日までの平日については、須磨キャンパスで1時間の延長をすることができたことは大きな前進である。大学周辺の状況変化を観察しつつ、学生の安全面も十分考慮して、更に今後の開館時間を検討したい。

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

第15章

基礎データ

大学評価  
(認証評価)  
結果

**[今後の改善・改革に向けた方策]**

図書館の開館時間の延長のように、学生からの要望があれば、さまざまな施設について検討する余地はある。図書館では1階のアートギャラリーの展示スペースについても、特定のイベント開催期間外の有効利用を現在、検討している。

ポートアイランドキャンパスにおける施設の利用時間についても、学生の要望を調べていきたい。

**F. 組織・管理体制**

**必須・施設・設備等を維持・管理するための責任体制の確立状況**

**必須・施設・設備の衛生・安全の確保を図るためのシステムの整備状況**

**[現状の説明]**

2006年度まで本学は、施設・設備に関する中・長期計画の策定を行ってこず、施設・設備の経年劣化に伴う補修、修繕等の対応に追われていた。省エネ対策についても、建物ごとに管理せざるをえない個所もあり、中央コントロールができないという構造的な問題を抱えていた。

また従来は、大学事務局及び短期大学事務局にそれぞれ施設課が設置されていたが、学園全体の施設計画の立案をはじめ施設・設備の整備、管理等の体制をより強化する必要も生じた。そこで2007年4月1日付けで『行吉学園事務組織規程』を改正し、法人本部に施設部を新設した。この規程によれば、施設部には施設課が設置され、その分掌事務は同規程第8条に定められている。また、この規程には、責任体制についても第15条に明示されている。

一方、衛生面については、2008年度より衛生委員会を設置し、教職員の健康障害を防止するよう施設・設備等のチェックもできるようになった。安全を確保するためのシステムについて、教育・研究活動面では、環境保全専門委員会を設置している（『神戸女子大学環境保全専門委員会規程』参照）。教育・研究活動以外の面としては、環境衛生管理、防災訓練の実施等があげられるが、環境衛生管理については専門の業者に外注し、防災訓練については、教職員、学生、委託業者も参加した訓練を毎年実施することを基本にしている。

**[点検・評価—長所と問題点]**

施設・設備等を維持・管理するための責任体制は確立している。その成果として、2007年6月末には、財団法人建築保全センターの建築修繕コストの運用監理コスト（概算／学校）の手法を使って建築・設備コストの調査を実施すると共に、専門業者に委託して目視を中心とした建物と設備の調査も実施した。現在は、この調査の報告書に基づいて、外部の専門的な知識の助言も視野に入れて、中・長期的視点に立った、施設・設備の基本的な整備計画の検討を進めている。また、2008年から2009年の2年間をかけ、大学の設備管理システム（中央コントロール）の更新改修工事もスタートすることとなった。更に緊急地震速報一斉配信システムの導入取り組みも具体的に検討に入っている。

施設・設備の衛生・安全の確保を図るためのシステムも整備されつつある。

問題点としては、現在の施設部のスタッフは、主に設備関係を専門としており、建築関係の専門家がいないことがあげられる。そのため、必要に応じて外部の建築事務所の1級建築士と相談し、施工管理を委嘱する等工夫をしている。他の面でも委託業者等と協同して将来計画を立案していく必要がある。

**[今後の改善・改革に向けた方策]**

新体制は、既に多くの成果をあげているが、2007年4月に始まったばかりである。専門的な人材等、人事の面を含めて、中・長期的な視点でこのシステムの評価をしていく。

建物の老朽化は、省エネや衛生・安全面にも係りがある。そのため施設・設備の維持管理体制の責任を持つ施設部と、衛生・安全面の委員会との関係についても整備していく。

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

第15章

基礎データ

大学評価  
(認証評価)  
結果

